

一般社団法人全国高等学校PTA連合会・小社合同調査
第8回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」結果より

保護者が最重要と考える情報は「進学費用」

4割の保護者が「興味を持った学校の見学に行く」と回答

リクルート進学総研 研究員

池内摩耶

少子高齢化・人口減やグローバル化や情報化の進展等に伴う急激な社会変化の中で、高校生の進路観の育成、進路先の決定における保護者の関わりがますます重要になっている。高校生にとって最も身近な大人である「保護者」ができることは何か。高校生と保護者の進路をめぐる意識と行動の実態を調べ、両者のよりよい意思疎通のあり方を研究するとともにその成果を広く社会に提言することを目的に、全国の高校生を持つ保護者とその子どもに対して、コミュニケーションの実態と様々な進路観に関するアンケート調査を2003年より隔年で実施してきた。その8回目となる調査の分析結果について報告する。

調査概要

- 調査実施者：一般社団法人全国高等学校PTA連合会、株式会社リクルートマーケティングパートナーズ
- 調査対象：高校2年生とその保護者（全国高等学校PTA連合会より依頼した11都道府県の公立高校27校：2年生2クラスの生徒とその保護者）
- 調査期間：2017年9月15日（金）～2017年10月26日（木）
- 調査方法：(1)高校生 ホームルーム時にアンケート実施 (2)保護者 高校生から保護者へアンケートを手渡しで依頼、実施
- クラスごと学級担任が高校生・保護者アンケートを
- まとめ、学校ごとに回収
- 有効回収数：高校生 1987名 ※全問無回答1名を除く 保護者 1722名 ※全問無回答11名を除く
- 回答者プロフィール
- 【高校生】
 - 性別
 - 男子53.5% 女子44.8%（無回答1.7%）
 - 高校タイプ
 - 普通科75.7% 専門学科20.4% 総合学科3.8%
 - 地域分布
 - 北海道11.9% 岩手県4.0% 福島県6.5% 群馬県11.6% 東京都11.6% 長野県8.8%
- 【保護者】
 - 続柄
 - 父親12.8% 母親84.1% その他0.8%（無回答2.3%）
 - 子どもの性別
 - 男子51.7% 女子45.7%（無回答2.6%）
 - 地域分布
 - 北海道11.9% 岩手県4.5% 福島県5.4% 群馬県12.0% 東京都9.4% 長野県8.3% 岐阜県13.0% 大阪府5.3% 和歌山県4.5% 岡山県12.0% 長崎県13.7%
- 地域別回収率
 - 岐阜県11.9% 大阪府6.7% 和歌山県3.9% 岡山県11.1% 長崎県12.1%

保護者の進路選択への関わり

「アドバイス」だけでなく一緒に「行動する」保護者へ
より具体的な進路情報を収集したい保護者増加の傾向

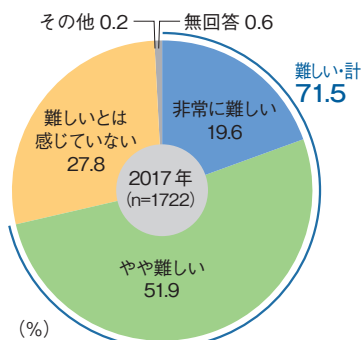
進路選択のアドバイスが「難しい」と感じる保護者は約7割

子どもの進路選択において、保護者の約7割はアドバイスが難しいと感じているようだ(図表1)。その理由の最多項目は、「入試制度をはじめ最新の進路情報を知らないから」45.5% (図表2)。以下、「社会がどのようなになっていくのか予測がつかないから」43.7%、「家庭の経済的な理由で、子どもの進路の選択肢を狭めざるを得ないから」24.5%と続く。

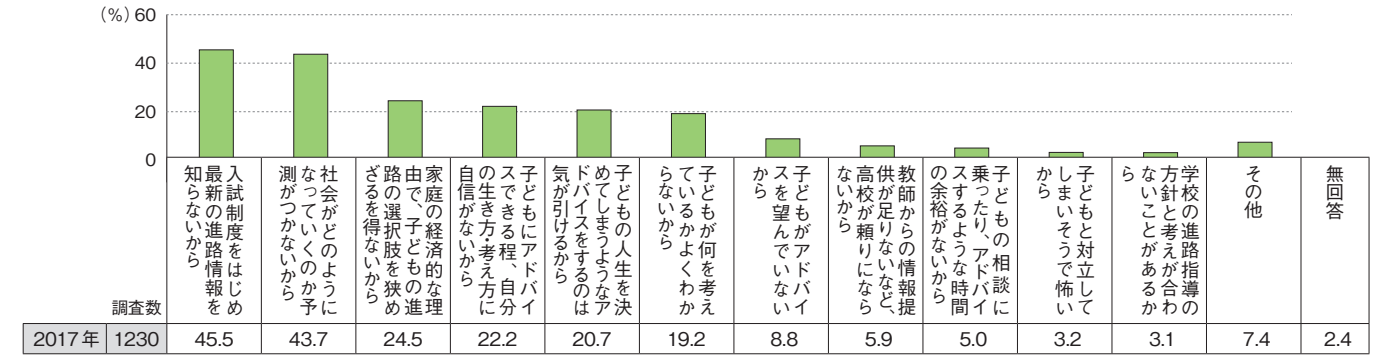
トップの「入試制度をはじめ最新の進路情報を知らない」は2015年から連続1位で、難しいと感じる要因のコメントにも「入試制度が複雑すぎてよく理解できないから」等の、多様化する各大学の入試制度に関する情報収集について不安視する声が聞かれた。一方、2位の「社会がどのようなになっていくのか予測がつかないから」は連続して減少している(2013年:52.7%→2015年:45.9%→2017年:43.7%)。これは2013年調査実施時は、翌年2014年に17年ぶりに消費増税

が予定され、なおかつGDPのマイナス成長が続いている時期で、社会変化に不安が半数を超えるポイントとなり、その後のアベノミクス・東京オ

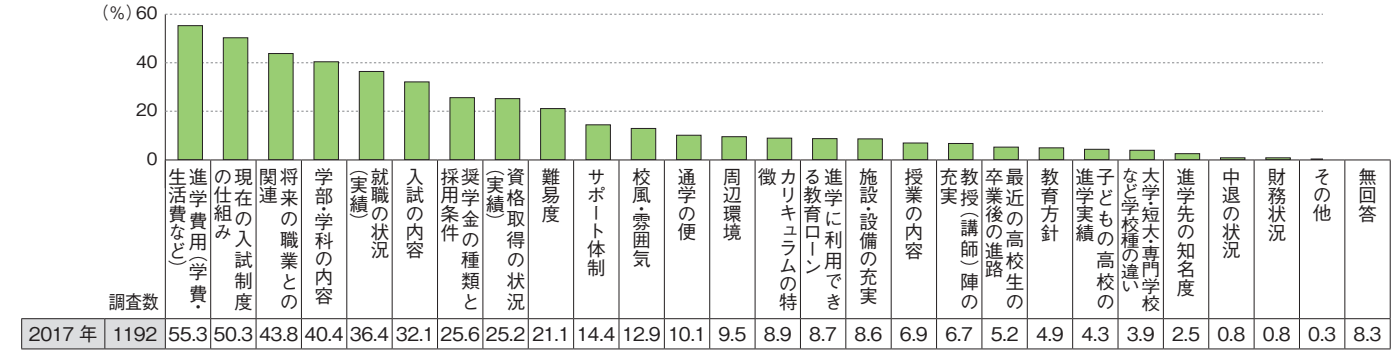
図表1 保護者 進路選択に際して、アドバイスの難しさ(全体/単一回答)



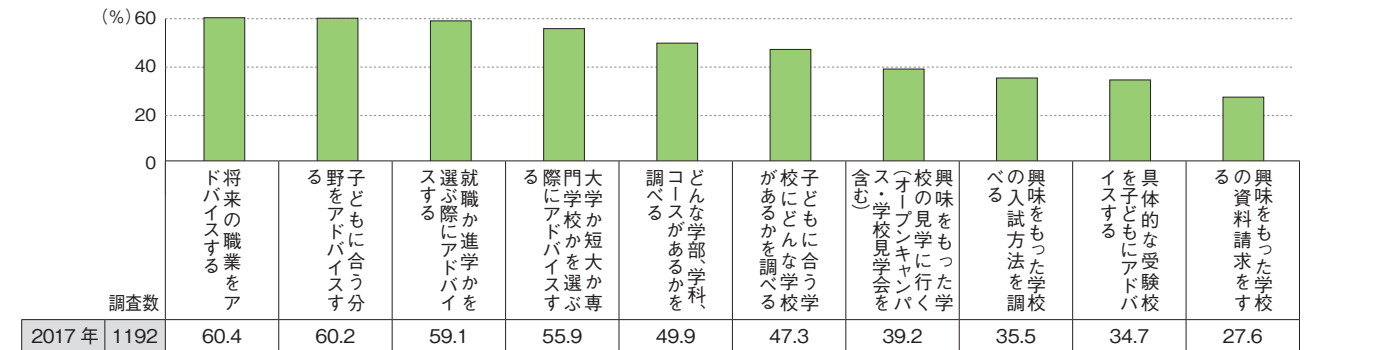
図表2 保護者 進路選択についてアドバイスを難しいと感じる要因 (「アドバイスが難しい」回答者/複数回答)



図表3 保護者 進学先検討時で特に重要な情報 (進学希望者/5項目まで選択)



図表4 保護者 進路選択行動の関わり方:行ったことがある (進学希望者/単一回答)



リンピックの影響で景況回復の期待値により、減少していると考えられる。

保護者が最も重要だと考える情報は「進学費用」が55.3%

子どもに進学を希望する保護者に進路選択において重要だと思う項目について尋ねると(図表3)、「進学費用」55.3%と「現在の入試制度の仕組み」50.3%が共に50%を超える回答があり、「進学費用」が前回の「現在の入

試制度の仕組み」を抑えて再び1位となった。景気回復傾向にあるものの、依然として家計において子どもの教育費負担は大きく、「進学費用」の情報は強く求められている。入試制度についても、直接本調査対象の高校生は関係ないが、2020年から始まる新共通テスト等の入試改革も少なからず影響していると考えられる。

また、子どもの進路選択において、保護者の関わりを見ると(図表4)、将来の職業をアドバイス、子どもに合う

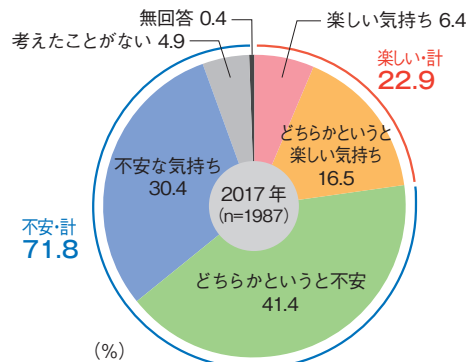
分野をアドバイス、学部・学科・コースを調べる等、具体的な進路情報に関わっていることが分かる。10項目中8項目で前回調査結果より、ポイントがアップしており、進路選択行動へ積極的に関わる保護者が年々増加しているようだ。特に「興味をもった学校の見学に行く」は前々回から11.0ポイントと全項目の中で一番アップしている。オープンキャンパスへの保護者参加が増加し、子どもと一緒に行動する保護者像が浮かび上がる。

進路選択について高校生の最大の気掛かりは「学力不足」 保護者には「望みを高く持ちすぎないでほしい」

7割の高校生が「不安」な気持ちを抱いて進路を検討している

進路先検討時の気持ちが「楽しい」は22.9%であり、「不安」71.8%を大幅に下回っており、3人に2人以上の高校生が不安な気持ちを抱えなが

図表5 高校生 進路を考えたときの気持ち (全体/単一回答)



ら、進路選択をしている(図表5)。そんな高校生に「進路選択についての気掛かり」について問うた(図表6)。「学力が足りないかもしれない」(58.7%)が突出して前々回、前回に続きトップで、経年で見ても(2013年:58.6% → 2015年:54.6% → 2017年:58.7%)と6割弱を維持している。以下、「自分に合っているものかわからない」「やりたいことが見つからない、わからない」(34.2%)が同ポイントで、自分の適性や目標が分からないことが大きな気掛かりとなっているようだ。過去調査と比較して、上位項目の顔ぶれは変わらないことから、進路選択の気掛かりを解消するためには、学力・適性・目標等、景況感に左右される

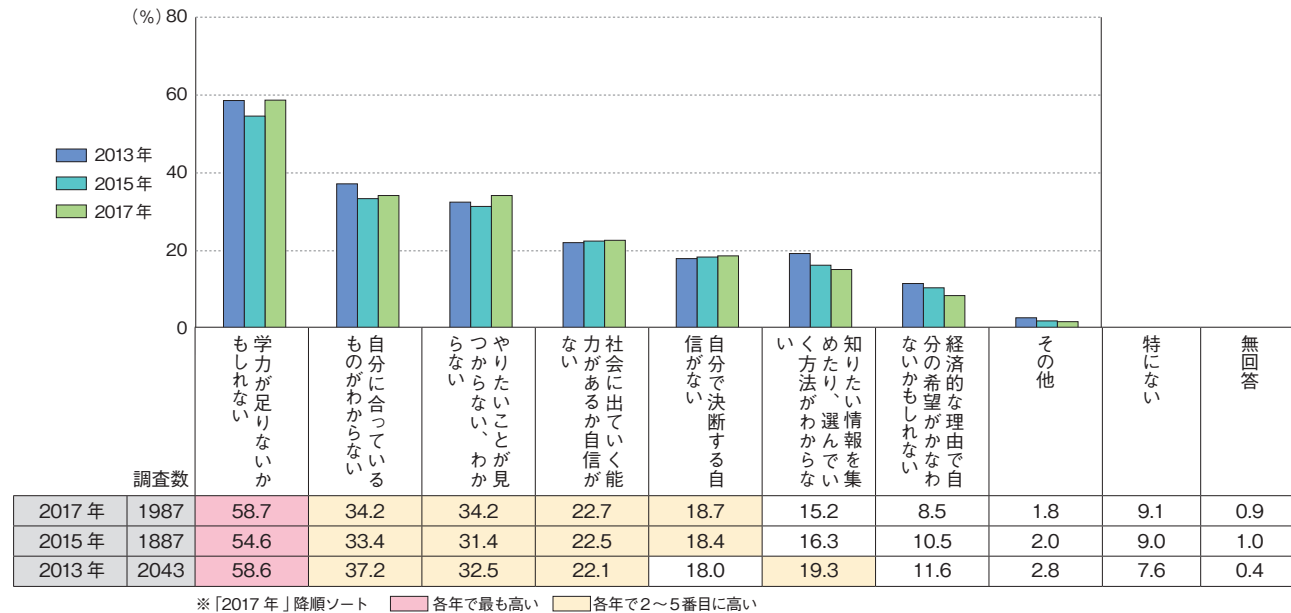
ことなく“自信”を自分自身でつけていくことが不安を払拭していくためには必要と思われる。

進路選択で保護者にやめてほしい行動は「高望み」と「勉強や成績の話」

進路選択で保護者に“やめてほしいこと”と“してほしいこと”について、高校生に尋ねた(図表7、8)。やめてほしいことは、「望みを高く持ちすぎないでほしい」が30.7%でトップ。続いて「勉強や成績の話ばかりするのはやめてほしい」30.0%、「プレッシャーばかりかけないでほしい」24.6%となった。

進路を考える時の気持ち別(楽しい/不安別)に見てみると、不安な気持ち-楽しい気持ちの差が大きいのは「望みを高く持ちすぎないでほし

図表6 高校生 進路選択についての気掛かり (全体/複数回答)

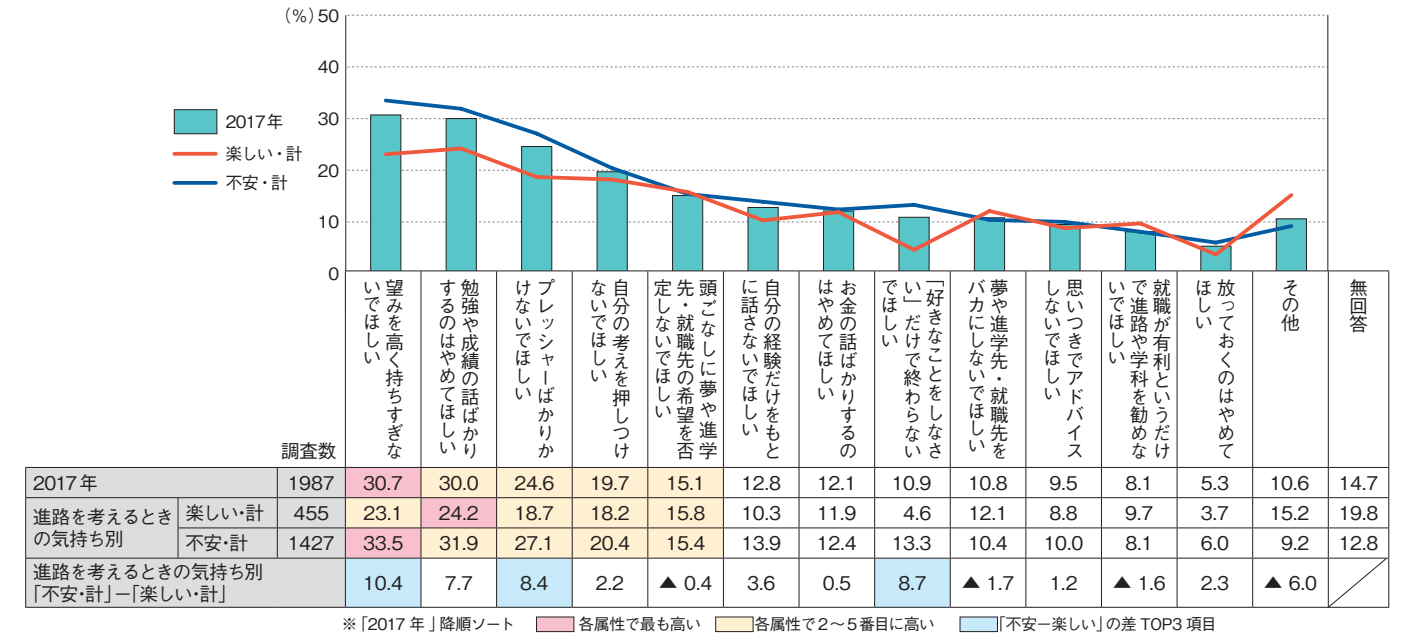


い」「好きなことをしなさい」だけで終わらないでほしい」「プレッシャーばかりかけないでほしい」の順だった。不安な気持ちの高校生は「高望み・プレッシャー」はやめてほしいと要求する一方、「放任」されることもやめてほしいという、より複雑な思いを抱いているようだ。

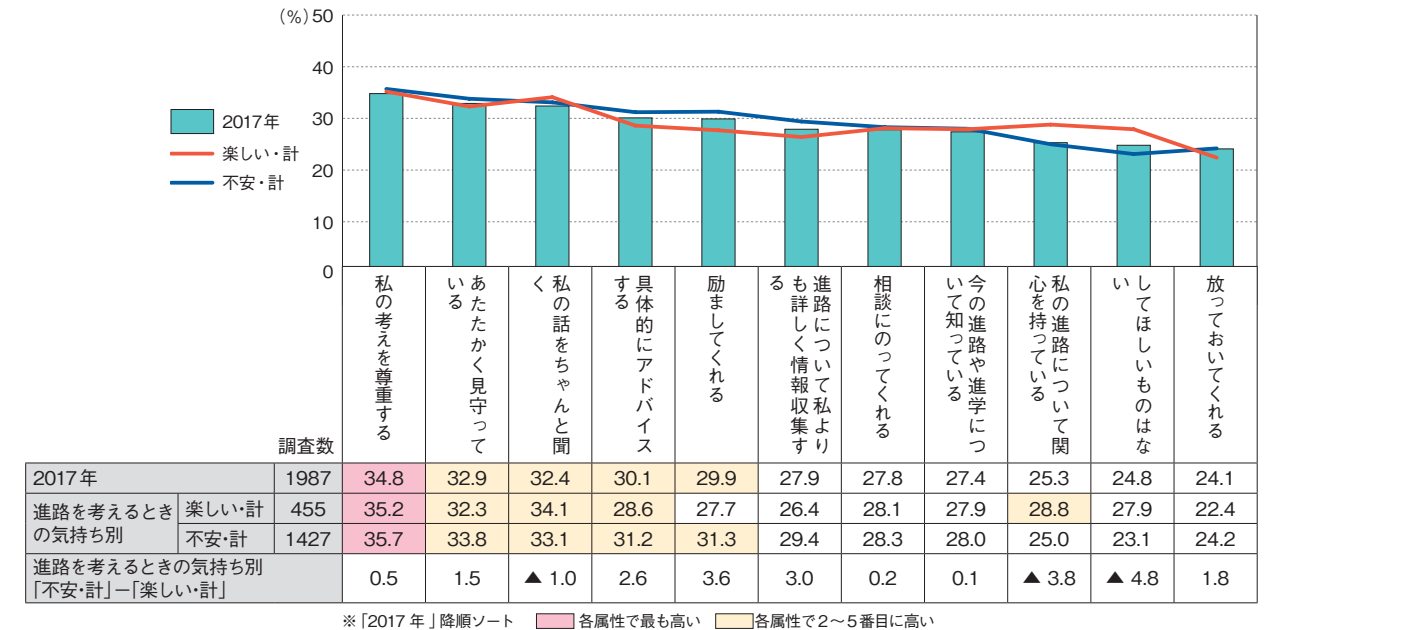
一方、進路選択で保護者にしてほしいことのトップ3は「私の考えを尊重する」34.8%、「あたたかく見守っている」32.9%、「私の話をちゃんと聞く」32.4%であった。こちらは、進路を考える時の気持ち別で見ても、大きな差は見られなかった。両項目とも複数回答で尋ねたが、

“してほしいこと”と“やめてほしいこと”の項目別ポイントを比較すると、全体的に“してほしいこと”のほうがポイントが高い傾向にある。これは進路選択という高校生的人生における一大イベントへの保護者の積極的な関与を希望している表れではないだろうか。

図表7 高校生 進路選択で保護者にやめてほしいこと (全体/複数回答)



図表8 高校生 進路選択で保護者にしてほしいこと (全体/複数回答)



7割超の保護者が 「経済事情が進路決定に影響あり」

新設された給付型奨学金の
保護者認知は約3割に留まる

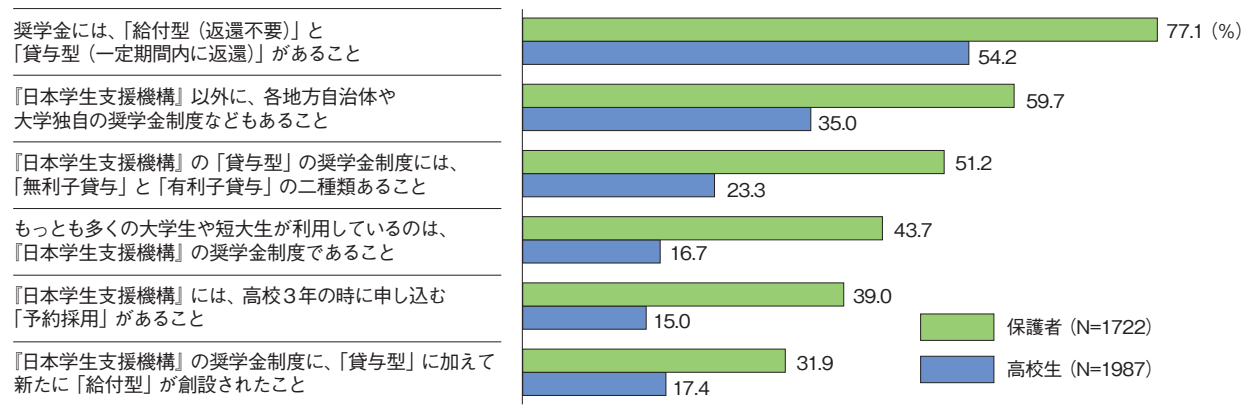
奨学金制度についての認知状況は(図表9)、保護者・高校生ともに、トップ3は「奨学金には、「給付型(返還不要)」と「貸与型(一定期間内に返還)」があること」「日本学生支援機構」以外に、各地方自治体や大学独自の奨

学金制度等もあること」「日本学生支援機構」の「貸与型」の奨学金制度には、「無利子貸与」と「有利子貸与」の二種類あることと、奨学金の種類についてであった。一方、申込方法・利用条件や新制度の創設等の具体的な制度の認知は進んでいない。全項目において、保護者のほうが高校生より認知度は高い。図表3でも述べ

たが、保護者が最も重要だと考える情報は1位「進学費用」であり、その1つの情報として奨学金制度についても積極的に収集しているようだ。

2017年4月1日に施行された給付型奨学金制度創設についての認知について問うたが、保護者31.9%、高校生17.4%とまだ十分に知られていない。

図表9 保護者 高校生 奨学金制度の認知状況(「知っていた」と回答した割合)



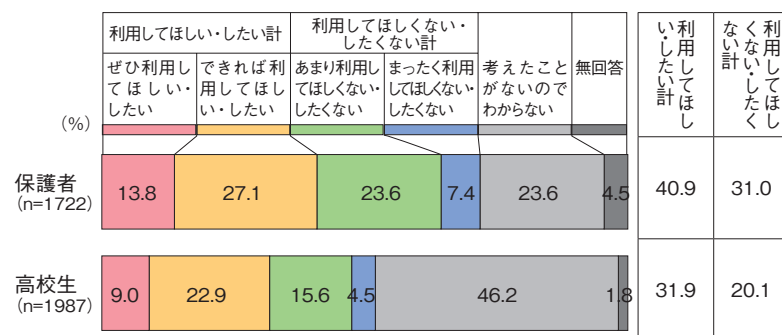
経済事情の進路選択影響は
7割超えるも保護者の
貸与型奨学金の利用意向は4割

貸与型奨学金制度を「利用してほしい・したい」と回答した保護者は「ぜひ利用してほしい(13.8%)」と「で

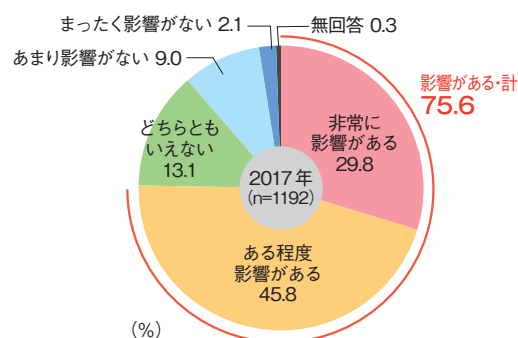
きれば利用してほしい(27.1%)」の合計40.9%。一方高校生は「ぜひ利用したい(9.0%)」と「できれば利用したい(22.9%)」の合計31.9%と保護者のほうが奨学金利用に強い意向がある(図表10)。また経済事情が進路決定

に与える影響について尋ねると、「影響がある」と回答した保護者は75.6%であった(図表11)。続柄別にみると、母親のほうが父親より高いスコアであった(父親:72.3%、母親:76.1%)。

図表10 保護者 高校生 貸与型奨学金制度の利用意向(全体/単一回答)

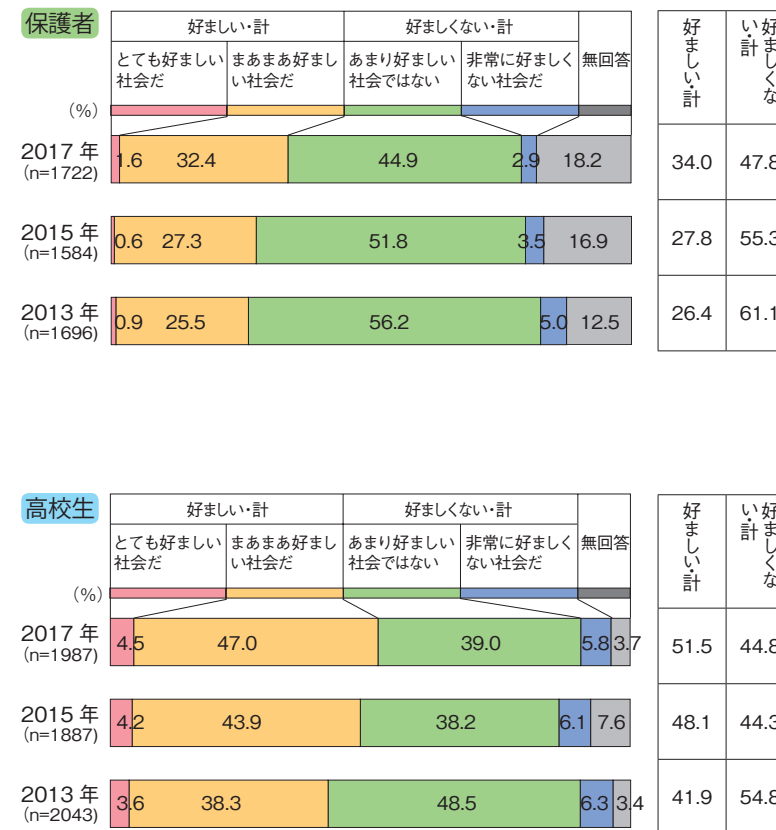


図表11 保護者 家庭の経済事情の進路決定への影響(進学希望者/単一回答)



引き続き、将来展望は回復傾向 高校生と保護者で異なる、未来社会への認識

図表12 将来社会への認識(全体/単一回答)



フリーコメント

【保護者】

■好ましい

- ・女性が出産しても働き続けることができる社会の雰囲気・環境が少しずつ整ってきているから。
- ・私が子供の頃より、いろいろな生き方が認められる時代になっているから。
- ・奨学金にも給付型が導入されるなど、こどもの教育も良くなっていきそうだから。
- ・オリンピックを控え、少しずつ景気が良くなりそうだから。

■好ましくない

- ・社会状況が不安定なため。
- ・今までに経験したことのない少子高齢化による社会。AIの発展する社会でどう生きることができるのか。
- ・社会の変化が激しい。効率化を求めるあまり、仕事の楽しさを感じにくい。
- ・オリンピックが終わってから就職活動をしなければいけないので、求人が減ってしまいそうだから。

【高校生】

■好ましい

- ・AIなどの登場で雇用も減るだろうけど、開発側として働くのはできるだろうから。
- ・オリンピックも近いので、雇用や経済はゆたかになると思うから。
- ・グローバル化が進んで、仕事の多様性が生まれたから。
- ・男女の格差がなくなってきているから。

■好ましくない

- ・少子高齢化社会が進み、自分たち若い世代の負担が重くなるから。今現在、政治状況もあまり良くないから。
- ・増税や社会保障の負担が大きくなっていき、若い人たちの暮らしが悪くなっていく一方だから。
- ・“ブラック企業などで残業時間が大幅に増えたため過労死してしまった”というニュースをよく聞くようになったから。

肯定的に捉える高校生が
51.5%と過去最高ポイント

これからの社会について、保護者・高校生はどのように捉えているのだろうか。将来社会への認識を尋ねてみた(図表12)。自分自身の将来に対しては半数以上の51.5%の高校生が「好ましい社会だ」と回答しており、経年で増加していた(2013年:41.9% → 2015年:48.1% → 2017年:51.5%)。反面、「好ましくない社会だ」と答えた高校生は44.8%いた。こちらは前々回調査よりは減少しているものの、

前回調査より微増している。理由を尋ねると、少子高齢化や増税・ブラック企業等、社会・就職不安の声も聞こえるが、グローバル化・オリンピックによる経済効果等から、経済状況が改善し社会環境がよくなることへの期待やAI発達による新しい雇用の創出等、全体的には将来への期待感の高まりを感じる結果となった。

一方、保護者については、「好ましくない社会だ」が47.8%で「好ましい社会だ」34.0%を大きく上回る結果となった。経年で見ると、「好ましい社会だ」が増加しており(2013年:

26.4% → 2015年:27.8% → 2017年:34.0%)、女性活躍の推進等で多様な働き方が認められる社会であり、給付型奨学金等社会からの教育支援の後押しもあり、保護者の時代よりも、より選択肢が多い社会に対する期待の声が挙がっている。

一方で、社会変化の激動、少子化、AI発達と効率化、国際社会情勢の不安等、様々な不安要素を危惧する声も多く、社会全体での景況感とは別で、保護者は高校生より個人レベルでの不安感を払拭し、明るい未来社会のイメージを描ききれないようだ。

AIやグローバル化の影響を感じつつ、保護者より前向きな高校生

AIは将来に「影響がある」と回答した高校生は保護者より13.3ポイントも高い

AI(人工知能)等の技術革新の普及・発達は将来に影響があると思うか尋ねた(図表13)。本調査項目は、昨今の高校生を取り巻く社会環境を鑑み、今回新しく追加した。高校生では「影響がある」は52.0%であるのに対し、保護者は38.7%と高校生を下回る。保護者は「わからない」が半数以上となっており、AI普及による子どもの将来への影響について具体的にイメージできていないようだ。男女別に見

ると、男子(55.6%)は女子(48.9%)より「影響がある」が6.7ポイント高い。保護者の続柄別では、父親(55.9%)のほうが母親(37.1%)より18.8ポイントも高く、男性のほうがAIの影響が強いと認識されている。

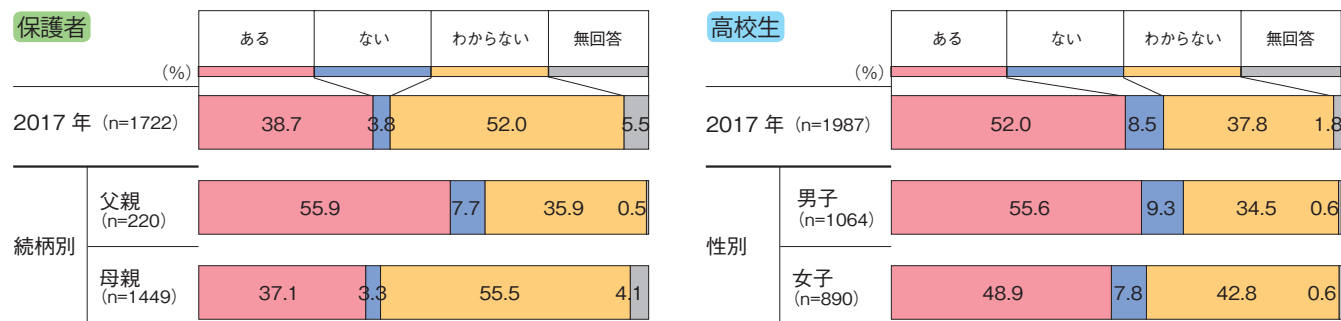
AIの将来への「影響がある」と思う理由として、高校生・保護者のどちらも「生活が便利になる」「人手不足を解消する」「新しい仕事生まれる」等メリットを既に感じている反面、近い将来、「人間の仕事が奪われる」と職業選択・雇用への影響を懸念する意見が見られた。一方、「影響がない」と思う

理由は、高校生では自身が将来就きたい職業(医療関連・メイク技術等)や新しい価値を生み出すことは「AIがとって代わることはなく、人にしかできない」という意見が目立った。

高校生の半数以上がグローバル人材になりたい。保護者より強い意向

年々グローバル化していく経済・社会を高校生と保護者はどのように捉えているのだろうか。将来グローバル社会で通用する人材になりたい(なっ

図表13 AI(人工知能)等の普及・発達の影響があると思うか(全体/単一回答)



フリーコメント

【保護者】

■ 影響がある

- ・職業がかわってくる。人間でしかできないことが重視されてくる。
- ・AIの発達などの技術革新の普及・発達にともない雇用が少なくなるように思う。
- ・私たちが高校時代になかった職業が現在存在する。予測不可能だから。
- ・手作りの良さや人との会話が社会と繋がっていくためには必要なことだと思うので、多様化する社会に対応できる人に育てる。

■ 影響はない

- ・どんな時代でも、人間ができること人間しかできないことがある。
- ・AIが発達しても将来はその時に自分でそれに合わせればよいと思う。
- ・影響しない生き方を選択することも可能。
- ・子どもがAIの影響を受けない「食」にかかわる仕事を希望しているため。
- ・近い将来、人工知能が人々の職をうばう事体がおこなわれるかもしれないが、雇用の確保は必ず行なわれる制度ができる。
- ・ロボットにより簡単な仕事は無くなると思うが、専門分野では人間の繊細さは、まだロボットには表現できない(まだ時間がかかる)と思う。

【高校生】

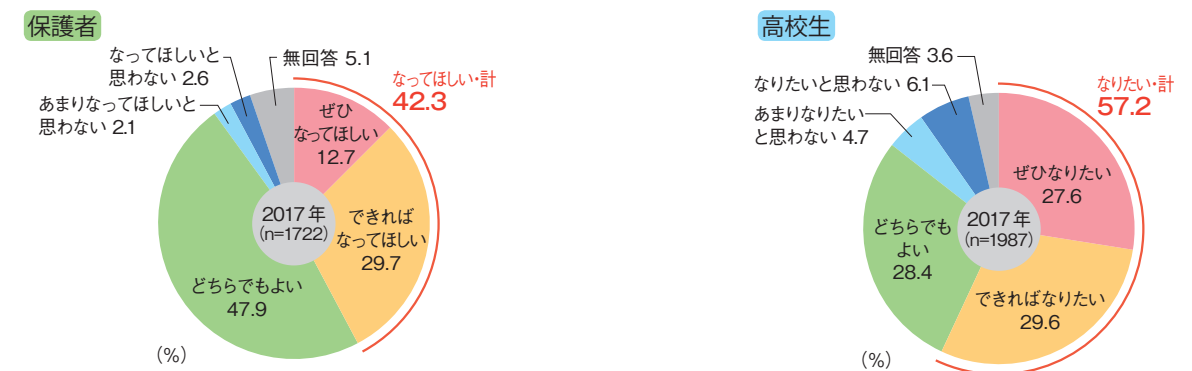
■ 影響がある

- ・なくなる仕事や新しく必要になる仕事が出てくると思うから。
- ・AIの発達がすすむと、人間の仕事が奪われる可能性がある。
- ・スマートフォンにも人工知能が入っていて、どんどん生活が便利になると思ったから。
- ・2045年には人工知能が人間の脳をこえると言われているから。

■ 影響はない

- ・AIが発達してもそれを制御するのは人間でないといけないから。
- ・AIは自動化は優れているが、新しい価値のあるものを見出せないから。
- ・私が目指している分野の仕事はAIにとってかわることができないと言われているから。
- ・人と人とのコミュニケーションが大切な職に就くつもりだから。
- ・医療は人の心に関わることなので、AIにはできないと思うから。
- ・メイクの技術はAIではできないと聞いたから。

図表14 グローバル社会で通用する人材になってほしい・なりたいか(全体/単一回答)



フリーコメント

【保護者】

■ なってほしい理由

- ・インバウンドの増加、日本から海外へ文化などを輸出する様な社会になる。
- ・今は英語が出来ないと出張にも行けない。外国の技術を導入するにも日本に居たままでは遅くなってしまい、ライバル社より有利にならない。
- ・日本国内に限定すると仕事に限られるので世界を相手にせざるを得ない。
- ・広い世界を見ることができ、様々な人との環の中で、成長して人生を充実させてほしいから。

■ なってほしいと思わない理由

- ・国際情勢が不安定だから。
- ・英語力があまりないし、テロが多いので最近外国に出るのがこわい。
- ・日本にいても外国人とのかわりがあるから。

【高校生】

■ なりたい理由

- ・グローバル社会反対派が何を言おうと、社会はどんどんグローバル化していくのだから、通用する人材になっていないと、取り残されてしまうから。
- ・日本の労働人口が減っている今、日本は外国の労働者を雇わざるを得ないと思うから。そんな「日本」で働いていくために、グローバル人材になるべきだと思うから。
- ・これから外国人や観光客が増えるので、外国人との交流は必須になる時代がくると思うから。

■ なりたいと思わない理由

- ・グローバル社会=英語というイメージが強く英語がとても苦手だから。
- ・日本のために働き、国内で活動できれば十分。

を超える57.2%で、2015年より7.6ポイント増加している。グローバル人材になりたい理由については、「訪日外国人観光客・外国人労働者の増加」「どんどんグローバル化していくので適応せざるをえない」等の、既に国内で起きている変化を捉え、グローバル社会に対応できる人材になれば「社会から取り残されてしまう」という危機感から、グローバルに活躍できる人材を目指すことが必然と考える意見が挙げられた。一方で、なりたいたと思わない理由としては、「日本のために働く人材も必要」「英語が苦手」等の語学面での不安と、「自分には関係ない」といった諦めが感じられる回答があった。

保護者については42.3%が「なっ

みると、「インバウンドの増加と対応」に加えて、「視野の広い考え方・働き方をしてほしい」という意見が挙げられている。思わない理由としては、「国際情勢が不安定」等、子どもを心配する意見が見られた。

注目したいのは、1番多かった回答が「どちらでもよい」45.5%であったことだ。理由を見てみると、「本人次第だから」「自分自身で決めてほしい」という子どもの意向を尊重したいという意見がある一方、「よくわからない」「その時になってみないとわからない」といったグローバル化が急速に進む中、その変化を予測できないという保護者の不安が垣間見える。

今回の調査を通じて見えてきたのは、子どもの進路選択の多様化や将来展望を前向きに捉えつつ、社会変化の

激しい社会を生きていく我が子の将来の選択に意欲的に関わろうとする保護者の姿だ。「日本の労働人口の49%が人工知能やロボット等で代替可能に」(10~20年後の予測、野村総合研究所2015)、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」(ニューヨーク市立大学キャシー・デビッドソン教授の予測)等、子どもが生きていく時代は、保護者が経験したことのない社会になることが予測されている。現在の延長線上に、将来を想像することは難しい。だからこそ「自分の子どもには失敗させたくない」という意識が強く働いているようだ。そのような世代観を捉え、大学もその時代に合わせた情報提供を行っていくことが重要となるだろう。